

平成 29 年度 各種調査結果等を活用した学力保障の取組事例

事務所名	盛岡	学校名	雫石町立雫石小学校	T E L	019-692-2203
------	----	-----	-----------	-------	--------------

諸調査結果の活用と校内研究が連動した学力向上の取組

【今年度の目標】

平成 27・28 年度の諸調査の結果分析から明らかになった本校の課題を改善するために、以下の目標を設定した。

- 各教科の重点領域または観点の平均正答率を上昇させる。
 - 国語科「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」領域の正答率を 75%以上にする。
(27 年度 73.1%、28 年度 68.2%)
 - 社会科「社会的な思考・判断・表現」の観点の正答率を 65%以上にする。
(27 年度 61.5%、28 年度 61.1%)
 - 算数科「図形」領域の正答率を 75%以上にする。
(27 年度 73.1%、28 年度 69.1%)
 - 理科「観察・実験の技能」の観点の正答率を 60%以上にする。
(27 年度 58.6%、28 年度 54.7%)
- 無解答率について、選択式問題については 1%、記述式問題については 10%以下にする。
(算出方法：各設問の無解答人数の合計 / 設問数 × 受験者数)
- 児童質問紙の振り返り活動についての質問で「よく行っている」「どちらかといえば行っている」と回答する児童の割合の合計を 90%以上にするとともに、「よく行っている」の割合を 50%以上にする。

【組織的な対応を図る上で工夫した点】

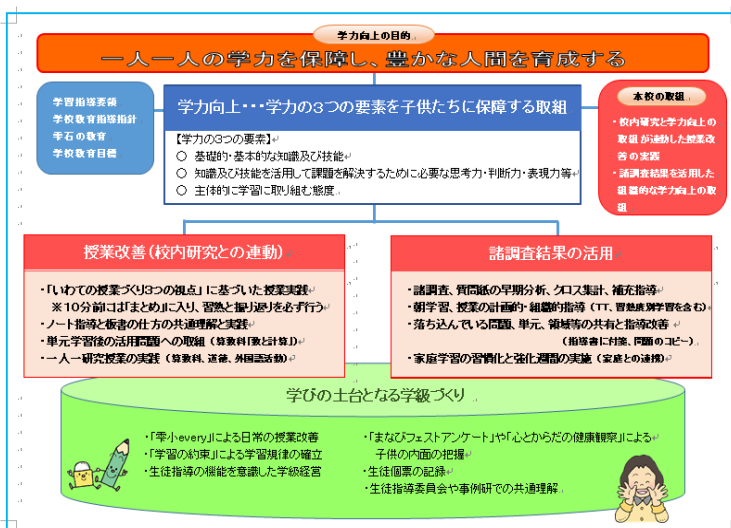
- 組織的に学力向上に取り組む校内体制の構築と実践（諸調査結果の活用）
- 学力向上の取組と校内研究が連動した授業改善の実践（授業改善）

【具体的な取組】

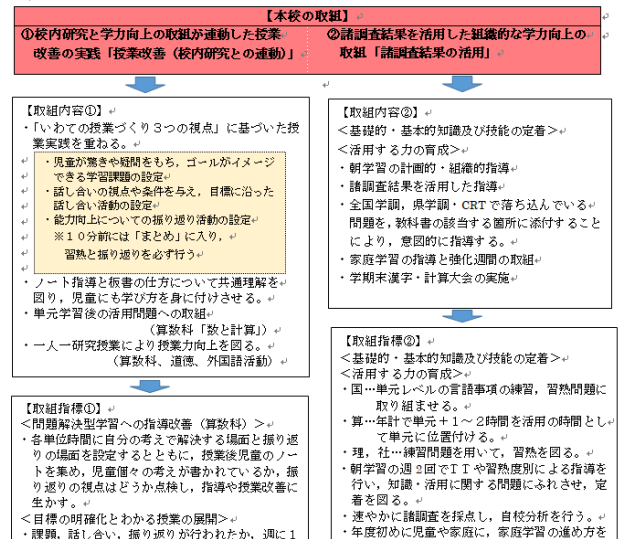
- 組織的に学力向上に取り組む校内体制の構築と実践（諸調査結果の活用）

(1) 学力向上の全体構想図、具体的な取組内容と指標による取組の明確化

学力向上には昨年度までも取り組んできたが、より組織的に取り組む校内体制を構築していくためには、次の二つが必要と考えた。一つ目、昨年度までの諸調査の結果分析から明らかになった本校の課題を改善していくための学力向上の取組を分かりやすく提示すること。二つ目、学力向上の取組を全教職員の共通理解の下、推進することである。この二つを展開していくために、学力向上の全体構想図【資料 1】と具体的な取組内容や取組指標、検証指標【資料 2】を策定して明確化を図り、全教職員の共通理解の下、学力向上に取り組んだ。



【資料 1】学力向上の全体構想図



【資料 2】取組内容・指標、検証指標（一部）

(2) 学力向上の取組年間計画の作成

組織的に学力向上に取り組んでいくためには、「誰が」「何を」「いつ」「どのように」行うのか明確にしていく必要があり、右の【資料3】学力向上の取組年間計画を作成した。

年間計画には全校共通して取り組むこと、各学年が取り組むこと、学力向上対策委員会の予定等を示すとともに、準備や作業・指導を誰がするのかも明記したことで取組をさらに明確にした。

		4月	5月	6月	7月
全校	授業改善	○校内研究と学力向上の取組が連動した授業改善 ○全体授業研究会(算数科, 国語科)を中心としてTT指導(支援員, 主幹) ○学習の約束(児童用), 年小・every(教員用)			
	朝学習	○漢字・計算ドリル等で基礎的・基本的な学習(担任) ○国語の言語事項プリント(プリント)			
	家庭学習	○家庭学習の手引き配布(4月 主幹・教務) ○家庭学習の習慣化を図る ○家庭学習の推進			
	生徒指導	○生徒指導委員会・生徒指導事例研究会での共通理解(生徒指導委員会は適宜開く) 学びフェスの開始(主幹 各担任) 7月 学級運営生徒指導研			
6年	朝学習(百進プリント準備・主幹) 習熟度別学習 5年担任・担任外	全国学力・学習状況調査	全国学力・学習状況調査	全国学力・学習状況調査	家庭学習強

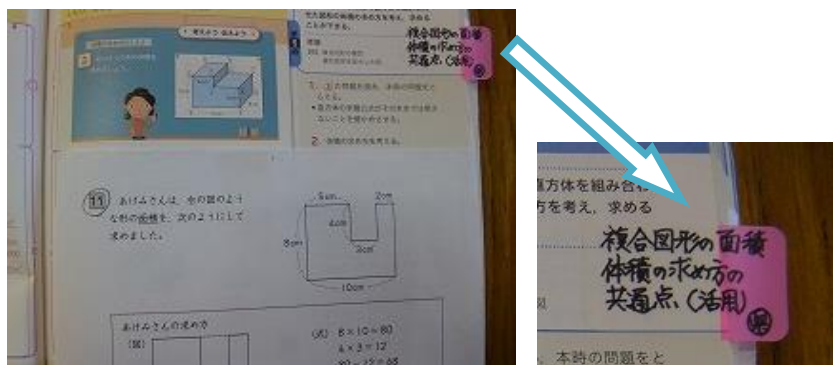
【資料3】学力向上の取組年間計画 (一部)

計画を基に「全国学力・学習状況調査」と「岩手県学習定着度状況調査」それぞれにおいて、早期に結果分析を行い、本校児童の実態の把握と改善の手立てを話し合った。また、本校児童の正答率が低かった調査問題を全教職員で解く時間を設け、求められている学力や授業で児童に付けたい力を確認することもできた。

(3) 諸調査で正答率が低かった問題、単元、領域等の共有と指導改善

28年度「岩手県学習定着度状況調査」において、本校児童の正答率が落ち込んでいる、または県平均正答率より低かった問題、単元、領域を洗い出した。その結果を基に、4月に全教職員で4・5年生の指導書に付箋貼りと問題のコピーを挟み込む作業を行った。

指導書に付箋と問題のコピーがあることで、意識して指導に当たるとともに、授業の中で練習問題、活用問題として調査問題に取り組むことができた。その時間にできなかった場合は、単元学習後の習熟の時間に取り組むことができた。



(4) 朝学習における計画的・組織的指導

本校では20分間の朝学習を設定し、曜日により読書や教科の補充を割当てている。内容については学年裁量としているが、ドリル学習の他に全校で国語科の言語事項のプリントや高学年は算数科、社会科、理科の練習問題・活用問題にも取り組んでいる。

また、朝学習の時間を充実したものにするために担任外教員や学校支援員も朝学習の指導に当たり、TT指導や習熟度別学習を実施した。1・2年生には学校支援員がT2として、4年生以上には担任外教員がT2や習熟度別学習のコースの担当者として指導に当たった。習熟度別学習は5・6年生で実施し、児童へのアンケートを基に2学級を3コースに分けて学習を行った。自分に合ったペースで学習ができたり、教え合いがより活発になったりして効果的であった。

4～6年生の朝学習での学校体制

4月上旬	6年生	練習問題・活用問題 【習熟度別学習 6年担任・担任外】
5・6月	5年生	国語・算数の学習 【担任外 T2】
9～10月上旬	5年生	練習問題・活用問題 【習熟度別学習 5年担任・担任外】
11～12月	4年生	国語・算数の学習 【担任外 T2】
1～3月	5年生	練習問題・活用問題 【担任外 T2】

※習熟度別学習コース

パンダコース (上位 担任外1名) コアラコース (中位 担任外1名) ウサギコース (下位 担任2名)

2 学力向上の取組と校内研究が連動した授業改善の実践（授業改善）

（1）校内研究の重点と指導過程

児童の学力向上を図るためには、授業改善が最も重要である。今年度から算数科を通して、「いわての授業づくり3つの視点」に基づいた授業が展開されるように校内研究を推進した。実践事例は、第2学年算数科「たし算とひき算のひっ算」である。授業に研究の3つの重点を位置付け、授業研究会を重ねた。

過程	○主な学習内容 ・予想される児童の反応	・指導上の留意点 ☆評価 〈評価方法〉
導入	1 問題把握 1 4 6 - 8 9 のひっ算のしかたを考えよう。	
	2 課題把握 ○既習事項（1 2 9 - 5 3）との相違点を確認する ・一の位も十の位も、そのままでは引けない。 一のくらいも十のくらいも ひけないときのひっ算のし方を考えよう。	②重点2・・・見通しの内容と見通しをもたせるための手立て 既習の3位数-2位数（百の位からの繰り下がりあり）の筆算の仕方を確認する。
	5分 3 見通し ○前時の十の位で引けないときは、百の位から1繰り下げたことを確認する。	・十の位がひけなかったときは、百の位から1繰り下げたことを確認する。
展開	4 振り返り ○振り返りの記述を「一、十の位でひけないときも、1繰り下げて計算すればよいことが分かった。」と書かせたい。そのために、学習課題と学び合いの視点、まとめを指導案のように考えた。	書で示す。 明を考えるようにす
	5 学び合い ○一の位、十の位の計算のしかたについて交流する。 ・一の位の計算 6から9はひけない。十の位から1繰り下げる。1 6 - 9 ・十の位の計算 【学びの視点】 1繰り下げたので、3。 百の位から1繰り下げる。 1 3 - 8 = 5 3 1 1 4 6 - 8 9 5 7	・筆算の操作の意味（十の位から一の位へ、百の位から十の位へそれぞれ1繰り下げる）を数カード、言葉による説明で確かめる。 ・引けないときは1繰り下げるといふ既習の計算との共通点に目を向けることができるようにする。 ☆既習を基に、3位数-2位数（十、百の位からの繰り下がりあり）の筆算の仕方を考え、説明している。（思考） 〈ノート・発表〉
まとめ	6 6 6 ○まとめ ・十のくらいから1くり下げる。百のくらいからも1くり下げる。	☆3位数-2位数（十、百の位からの繰り下がりあり）の筆算ができる。（技能）〈ノート〉 ☆既習を基に、3位数-2位数（十、百の位からの繰り下がりあり）の筆算の仕方を考え、説
	7 7 7 ○練習問題、補充問題と進む。	
振り返り	8 8 8 ○振り返り ○分かったことを記述する。 ・一の位と十の位で引けないときも（十の位で引けないときと同じように）、1繰り下げて計算すればよいことが分かった。	③重点3・・・「分かった」という実感をもたせるための手立て 計算練習では、△2、補充問題と進ませ、個に応じた達成感をもつことができるようにする。 ・板書や練習問題の取組みを振り返って分かったことを記述できるようにする。

(2) ノートの使い方と板書の仕方の共通理解

①ノートの使い方

- ・単位時間のノートは、日付、学習課題、自分の考え、学習内容、学習のまとめ、振り返り等を書く。
- ・前時の学習の想起や単元全体の振り返りにノートを活用できるようにする。
- ・学習課題は青線、学習のまとめは赤線で囲む。

算数ノートの場合 ※新しいページからノートを始める。単位時間に何ページ書かせてもよい。

○月○日 (○) 単元名や 時間数	(友達の意見をメモする)
問題文は鉛筆で囲む 貼ってもよい ※問われているところはペンで印をつける	まとめは赤ペンで囲む
課題は青ペンで囲む	(数問取り組ませる)
(式や式の根拠を書く)	(分かったことの記述)
(計算で 図で 数直線で 説明のメモで)	


②板書の仕方 ※黒板を3分割して板書する

○月○日 (○) 単元名	課題 青ペンで囲む	まとめ 赤ペンで囲む
問題文 ・紙板書でもよい ※問題文は白チョークで囲む	自力解決 ※大事な言葉は赤チョークを使い、 まとめの記述に生かす。 ※本時で分からせたい内容について でも赤や黄色のチョークを活用し、 振り返りの記述に生かさせる ようにする。	練習問題 ※複数問用意する 振り返り ※振り返りの交流で出たよい 考えは、板書する。
見通し		
自力解決		

(3) 零小 every の作成

学びの土台となる学級づくりのため、児童には「学習の約束」を提示し、定期的に確認しながら学級づくりを進めた。教職員には【資料4】「零小 every」を配付し、教室に掲示した。

本校の校内研究である算数科において「いわての授業づくり3つの視点」が位置付いた授業改善に取り組んでいる。これは他教科の授業改善にも共通している取組である。学力向上の取組は、日常的に全教科で行わなければならない。「零小 every」には、校内研究で共通理解を図った児童の学習用具や授業の終わり10分前には「まとめ」に入る等の授業前・授業中・授業後の留意点等を示し、日常の授業改善の目安として作成した。



零小 every

板 書 前	<p>☆ゴールの明確な授業を構想する。この時間では何を教えるか！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考えられなかったことを考えられるようにする。(単元感想も立てる)。 ・判断できなかったことを判断できるようにする。 ・表現できなかったことを表現できるようにする。 <p>☆「身がまえ」・「ものがまえ」・「心がまえ」で、学習の準備をさせる。</p> <p>(身がまえ) 姿勢を正しく...</p> <p>(ものがまえ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉛筆 1~3年生:8か2B 4~6年生:H8まで。 (鉛筆・鉛筆キャップは、絵の入っていないものを使用)。 ・けしごも(白)・下じき(無地)・ミニ定規 ・赤青ペンまたは赤青鉛筆。 (シャープペン) 色ペンは持ってこさせない。 ・教科書、ノートを開いて待たせる。 (心がまえ) 「やるぞ、みんなで作るようになるぞ」という空気をつくる。
板 書 中	<p>☆問題解決型の流れに沿って授業をする。</p> <p>「いわての授業づくり3つの視点」を大切に...</p> <p>①見通し ②学習活動 ③振り返り。</p> <p>☆終わり10分前には、「まとめ」に入る。習熟と振り返りを必ず行う。</p> <p>☆板書も構造的に。問題は口(鉛筆)、課題は口(青)、まとめは口(赤)で囲み、3分割で。</p> <p>☆授業は、テンポよく進める。指導者が話しすぎない。</p> <p>☆キャッチボール型から、ハレーボール型の授業へ。</p>
板 書 後	<p>☆ノートやプリントに目を通す。</p> <p>☆授業とのつながりを考えて、家庭学習の課題を出す。</p>

【成果】

今年度の目標に対しての結果（岩手県学習定着度状況調査において）

1 各教科の重点領域または観点の平均正答率を上昇させる。

	国語科 「伝統的な言語文化と国語 の特質に関する事項」領域の 正答率を75%以上にする。	社会科 「社会的な思考・判断・表 現」の観点の正答率を 65%以上にする。	算数科 「図形」領域の正答率を 75%以上にする。	理科 「観察・実験の技能」の観 点の正答率を60%以上に する。
H28	68.2%	61.1%	69.1%	54.7%
H29	76.1%	68.6%	59.2%	71.6%
比較	+7.9ポイント	+7.5ポイント	-9.9ポイント	+16.9ポイント

2 無解答率について、選択式問題については1%、記述式問題については10%以下にする。

	国語科		社会科		算数科		理科	
	選択	記述	選択	記述	選択	記述	選択	記述
H28	1.2%	7.8%	0.5%	6.0%	1.8%	3.4%	0.8%	2.9%
H29	3.6%	7.6%	1.9%	4.6%	3.7%	5.4%	0.8%	3.0%
比較	-2.4%	+0.2%	-1.4%	+1.4%	-1.9%	-2.0%	±0%	-0.1%

3 児童質問紙の振り返り活動についての質問で「よく行っている」「どちらかといえば行っている」と回答する児童の割合の合計90%以上にするとともに、「よく行っている」の割合を50%以上にする。

よく行っている	どちらかといえば行っている	合計
12%	75%	87%

上記の結果や学力向上の取組から明らかになった成果

校内研究との連動した授業改善

- 「いわての授業づくり3つの視点」に基づいた授業が全教職員に意識されてきている。また、研究の重点、授業における指導過程やノートの使い方、板書の仕方についても研究会等で繰り返し共通理解を図ったことで授業改善が推進されてきている。
- 一人一研究授業の取組を通して、教職員相互の授業力向上が図られている。

学力向上の校内体制の構築と実践（諸調査結果の活用）

- 岩手県学習定着度状況調査において、国語科、社会科、理科の重点領域または観点の平均正答率を上昇させることができた。特に理科では重点領域だけでなく平均正答率も昨年度比較で11.5ポイント上昇させることができた。昨年度まで研究教科として授業改善を図った成果と考えられる。
- 全国学力・学習状況調査では、国語A・B問題、算数A・B問題全て全国平均を上回った。また、同じ児童が昨年度実施した岩手県学習定着度状況調査の正答数分布グラフと比較して、今年度は全国や岩手県に近づいた分布になった。
- 授業改善とともに朝学習においても、計画的・長期的に練習問題や活用問題に取り組んだことで定着が図られてきている。

諸調査結果の活用と校内研究が連動した学力向上の取組を通して、全教職員で取り組む校内体制が整ってきて、次年度以降も改善しながら実践できる見通しができたことが大きな成果である。児童の学力向上も成果が表れた一方、課題も見られるので、さらに校内研究と連動した授業改善を推進していきたい。